

日中ポライトネスの対照研究：中国人日本語学習者への指導方法開発に向けて

平, 静

<https://doi.org/10.15017/1654602>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	平 静			
論文名	日中ポライトネスの対照研究 —中国人日本語学習者への指導方法開発に向けて—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松村 瑞子
	副査	九州大学	教授	井上 奈良彦
	副査	九州大学	准教授	西山 猛
	副査	日本赤十字九州国際看護大学	教授	因 京子
	副査	麗澤大学	教授	井上 優

論文審査の結果の要旨

本論文は、自ら収集した会話資料を分析することで日本語と中国語で使用されるポライトネス・ストラテジーの類似点と相違点を明らかにし、さらに日本人と中国人のポライトネスに関する認識およびその認識に基づく言語行動の相違を明らかにした研究である。本論文で得られた結果を活かして日本語ポライトネス指導の実践を目指しており、中国の日本語教育現場において異文化間コミュニケーション能力を養成することに大いに資できると期待される。

本論文は全6章から構成される。

第1章序論では、本研究の目的、研究対象、研究方法、論文の構成などについて述べた。

第2章では、ポライトネスの主な先行研究を、ポライトネスの枠組みに関するもの、日本語・中国語のポライトネス研究、対照研究などに分類して概観した後、本論文の立場を明らかにした。

第3章以降が本論である。第3章では、自ら録音、文字化したインタビュー番組のデータを分析することで、日中両言語で使用される具体的なポライトネス・ストラテジーの特徴および、それぞれのストラテジーの使用率の類似点と相違点を明らかにした。その結果、日本語でも中国語でも、相手に親しさを示すポジティブ・ポライトネス（認められたいという欲求を満たすことで示されるポライトネス）でFTA（相手のフェイスを脅かす行為）を解消し、距離を縮めるような言葉遣いがよく使われていることがわかった。また、中国人学習者にとって、日本語の難しさは、語形そのものではなく、対人関係や社会的ルールを考慮しながら、社会的慣習に従って、場面に応じて使い分けなければならないところであることが分かった。日中両言語のポライトネスにおける一番大きな違いは、ネガティブ・ポライトネス（自らの行為を妨げられたくないという欲求を満たすことで示されるポライトネス）に対する使用上の認識の違いであった。特にネガティブ・ポライトネスの「敬意を払う」というストラテジーについては、日本語と中国語の社会慣習の相違が、両言語におけるポライトネスに対する認識および敬意を示す様式に大きな影響を与えていることが明らかになった。

第4章においては、中国で日本語を専攻とする大学生（以後学習者）と日本語母語話者（以後母語話者）を対象にポライトネス意識の類似点と相違点を調査分析した。その結果、対話者間の関係が「疎」の場合、学習者は垂直方向の人間関係である上下関係を最も重視しているのに対して、母語話者は水平方向の人間関係である内外・親疎関係をより重要だと考えていることが分かった。また、学習者は「上」である人が普通体を使うのが適切かどうかについて「上下」と「場」によって判断する一方、母語話者は「親疎」と「内外」という視点から判断した。次に、「親」の関係の場合、日本語においては基本的に「私的な場面での親子」の会話は普通体で話す、「表現

意図」によって敬語を使うことが認められる。一方、学習者の多くは、家族の会話については、「上下」より「親疎」を重視しており、「表現意図」があっても丁寧体の使用は「不自然」と見なされた。また、対話者が「同且つ親」の関係を持っていても、話の内容が相手に被害を与える可能性が高い時は、半数近くの学習者は、FTA の度合いが高いと判断しネガティブ・ポライトネス・ストラテジーが使われると考えた。

第5章においては、中国人学習者が誤解しやすい日本語のポライトネスに関して、学習者と母語話者との使用実態を比較した。母語話者と学習者の被験者に、日本語の敬語を含んだメール文を示し、適切かどうか、また不適切と思う場合はその理由を書くと同時に修正するように指示した。分析の結果、上級日本語学習者は日本語ポライトネス表現の語形上の誤用は少ないが、運用上の誤用が多く、取り分け「恩恵行為に対する配慮意識」が不足していることが明らかになった。

終章たる第6章では、本研究のまとめ、日本語教育への示唆と今後の課題について述べた。

本研究では、先行研究を踏まえた上で、主として対照分析的観点から、日中ポライトネス・ストラテジーの特徴の類似点と相違点を明らかにした。またその結果に基づき、対人関係の視点から日本語母語話者と中国人日本語学習者におけるポライトネス意識の相違を究明した。さらに、アンケート調査を通して、中国人日本語学習者のポライトネス表現に存在する問題点および日本語のポライトネスに関する意識を明らかにした。これらの結果を基に、具体的な例を挙げながら、学習者に対して日本語と中国語の違いを認識させるようなやり方で日本語ポライトネスを指導する方法を例示した。本研究を発展させることで、中国語における日本語教育および異文化理解教育におけるポライトネス指導の実用化に資することが期待できる。よって、論文調査委員会は、本論文を博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。

